



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

八四  
2131  
6

北越雪譜二編三之卷

目録

○鳥追櫓

順列上下小

○地獄谷の火

○無縫塔

○年賀の哥

○管神御傳畧

○異獸

○弘智法印

○白鳥

○浮嶋

○美人

○雪霜

○越後の人物

○北高和尚

○逃入村の不思議

○田代の七ッ釜

○火浣布

○兩頭の蛇

○土中の舟

○石打明神

○峨眉山下の標準

○苗場山

三四月の雪

○鶴恩小報也

通計二十三條

右異獸より以下分けて四の卷とモ

北越雪譜二編卷三

越後

鈴木牧之編選

江戸

京山人百樹增修

○鳥追櫓

農家市中正月の行事小鳥追との事あり此事諸國にも  
あまび其あを處其國小よりてきゑぐうる事ハ諸書小散見せり江  
戸の鳥追といへ非人の婦女音曲をを女太夫とて木綿の衣服を  
うつすく着あく顔を粧ひ編笠をかむり三弦小胡ちうどを  
あそび賀唱をすくろくうひ門と小立て錢を乞ふ此事元日よ  
りちづれ松の内をきりとも松をきてもありとぞ我  
越後少シテ小正月の十五日以下を以て鳥追櫓とて去年より取除をき  
たる山をも雪の上小雪を以て高さ八九尺あるハ一丈余ゆき高さ小

應トシ末を廣く雪ふて櫓を築立と小登る<sup>フ</sup>ぎ階を雪ふく  
作り頃を平坦小々 松竹を四隅小立ちを張<sup>ス</sup>モ<sup>テ</sup>度<sup>キ</sup>心<sup>ハ</sup>内  
ふ<sup>ク</sup>居<sup>ス</sup><sup>ギ</sup>やうふむろをあきさくべ小童等<sup>ニ</sup>小あり<sup>ム</sup>物を喰ひ  
あ<sup>リ</sup><sup>テ</sup>遊び鳥追哥をう<sup>ス</sup>テもの一つ小「あのどりや。ど<sup>リ</sup>ち<sup>づ</sup>てき  
と、あきぬの<sup>ノ</sup>ふくも<sup>リ</sup>てきて<sup>ム</sup>。うふをりつても<sup>リ</sup>てき、ちををぬく<sup>ベ</sup>  
あ<sup>リ</sup><sup>ミ</sup>きこ<sup>ミ</sup>ちぞのどりも<sup>カ</sup>ぞのどりも<sup>ナ</sup>ちや<sup>ク</sup>と<sup>モ</sup>の<sup>リ</sup>上<sup>ム</sup><sup>シ</sup>お<sup>ぐ</sup>ら  
のさ<sup>ク</sup>へたのどりも<sup>リ</sup>て<sup>モ</sup>も<sup>リ</sup>めも<sup>リ</sup>どり<sup>タ</sup>ちや<sup>ク</sup>と<sup>モ</sup>の<sup>リ</sup>上<sup>ム</sup><sup>シ</sup>お<sup>ぐ</sup>ら  
早苗田<sup>サ</sup> 崎<sup>サ</sup> 鳴<sup>サ</sup> 鳩<sup>サ</sup> 可<sup>リ</sup> 立<sup>ス</sup> 已<sup>リ</sup> 等<sup>ス</sup> 裏<sup>ス</sup>  
あ<sup>リ</sup>ハ<sup>カ</sup>の掘揚<sup>ヤリアゲ</sup>雪をきく<sup>ス</sup>の上<sup>ス</sup>小雪を以<sup>ス</sup>て四方<sup>シラバ</sup>堂を作りたて雪  
ふ<sup>く</sup>物をも<sup>リ</sup>て<sup>ギ</sup>棚をもつくりむろをあきつ<sup>ス</sup>称<sup>ス</sup>あ<sup>リ</sup>や<sup>ク</sup>んせん<sup>ス</sup>ん<sup>ス</sup>林<sup>ス</sup>  
此雪の棚小<sup>シ</sup>き物を煮燒<sup>シキ</sup>一濁酒<sup>タマ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>ミ</sup>小童大勢雪の堂小<sup>シ</sup>  
き遊<sup>ハシ</sup>同音<sup>トウキン</sup>小鳥追哥をう<sup>ス</sup>ヒ終日<sup>ヒツ</sup>小ゆき<sup>ス</sup>して遊び<sup>ス</sup>モあれ  
暖<sup>ハシ</sup>國<sup>カ</sup>ふ<sup>く</sup>正月<sup>カニ</sup>あそび<sup>ス</sup>此鳥追櫓宿内<sup>ス</sup>小<sup>シ</sup>くつと<sup>ス</sup>作り

黨をうけてあると云ふ

○雪蠅

前ももももももももももも  
北國中ふして越後ハ第一の雪国すりそり  
中ふも魚沼古志頸城の三郡を大雪とも毎年一丈以上の雪中ふ  
冬をうをども寒氣江戸ふさまじう。更うと江戸ふ寒中せ  
人うう五難組ふしら霜ハ露のももとぶ所ふて陰うり雪ハ雲比  
うも所ふて陽うりとくもぐうりかう雪中うもと夏の儲ふ  
時う野菜のうるも雪の下ふ崩しひごとの用をうもと夏の儲ふ  
もよきのたゞひわもとども暖国ふうも夏うちの遅きとく三月ふ  
うごめく梅の花を見五月の丸茄子を初物とも山中ふううふ  
山櫻のうう四月のもも五月ふうう所もあうう

○地獄谷の火

此書の前編上の巻雪中の火といふ條ふ六日町の魚沼郡西の山手ふ地中より火の燃る事をも。せー地獄谷の火の変をり。せーあるあるあるある。も。そ我越後ふ名高く七不思議ふかぞいふ蒲原郡如法寺村百姓莊右門七井附孫六ヶ家ふも地小あり家ふある地中より燃る火ハ普く人の知る所ある。其火より盛大うハ魚沼郡のうちの小千谷の在地獄谷の火あり。唐土ふ是を火井とひ。近來此地獄谷小家を作り地火を以て湯を煙客煙客を待て浴き。も夏秋のそぞらまで遊客多く。此火井他國ゆきよどく。越後ふ多。先年蒲原郡の内或家ゆく井を掘。其夜医师來りて井を掘。更に聞家ふ飯。時挑灯を井の中に入り。みく井を見立。きり。井中より俄ふ火をひ。火勢甚し。小燃あぐりけ。近隣のもの。火事あり。と。をつ。井中より火のゆきを見て

此井を掘。ゑ。此火あり。と。村のもの。口く。小主人を罵り。恨みけ。主人も此火をあそび。埋。と。此地火。一小陰火。といふ。の如法寺村の陰火。も。微風の氣。づ。小発燭の火を。も。せ。風氣。手ふ應て燃。陽火を得。も。燃。寛文のむ。莊右門如法寺村庭ゆく韁を。はり。す。時。より燃。も。わ。と。ぞ。前ふ。井中の火を。医者。が。挑灯を。井の中。き。の。ふ。の。陽火。ふ。の。え。べ。・。ま。そ。又。頸城郡の海邊。未能生宿。といふ。北陸道の官路。此宿。より山手。ふ。入。更二里。を。り。小間瀬口。との。村。あり。との。農家。ふ。地火。を。ひ。そ。を。変。如法寺村の地火。ふ。同。と。ぞ。此。や。と。用。水。ふ。き。所。要。と。旱。の。を。り。ハ。山。ふ。就。井。を。横。小堀。く。水。を。得。變。あり。ある。時。井。を。掘。く。横。小。り。時。穴。の。嚮。き。を。て。も。た。ふ。炬。を。用。ひ。と。小。陽。火。を。得。く。陰。火。忽。ち。狀。あ。ぐ。人。是。う。爲。小。燒。死。一。け。と。ぞ。漫等。の。変。を。も。の。も。う。小。越。後。の。うち。み。地

卷之十

卷之三

火をひきと火脉の地あやをまど陽火を得えて發せざるも多う

百樹曰余小千谷よあらへ時岩居余小地獄谷ぢごくの火ひを見せんと  
社友五人よを伴ひ用意よういの酒食しゅしょくを美奴みの二人ふたか荷はり余ち京水きょうみと同  
行ゆき十人じゅう小千谷ちやくをもよまと西にしの方ほう・新保村しんぼ・葛川くずがわ・新田しんたよりよ村むら  
を歷へく一宮いちのみやといふ村むらふひづる山間さんかんの蒙畦もうけ曲節まげつを茲こゝ抵おさる行程こうり一里半  
可むうり是日そのひ、ことふ快晴きがせて村落そらくの秋景しゅうけい百逞ひゃくとう目めを奪だつふまえ平山ひらやま  
一ツを踰こえて坡きあり則すなはち地獄谷ぢごくひづるの徑きみちあり坡きの上うより目めを下させ  
一ツの茅屋もやあり是そ本文もと小こひづる混堂もんどうあり人ひと坡きの半なかふひづる時  
茅屋もやの樓上ろうじょう小こ四五人の美婦びふありととものく檻はなわふよりて遙とほかの  
人ひとを指さすありあひ、笑わらひあひ、名なをよびあひ、手てをうちたさ  
あひ、手てをあげまわく四面しめん皆みな山やま老樹ろうじゆ鬱然うつぜんとして翠翁塞すいおうの

中少個美人を見ること考狀一星狸小あくどんバウスバ獨さん  
といひひけとば岩居友ざもと相顧手を拍て笑ふこと小千谷の下  
町といひ所の酒樓ふ居る酌株の哥妓どすうり岩居朋友と計り  
竊ふ此小招もまこと余ふ興きん為とぞ渠ハ狹ふあくどー岩居  
小魅きとふるうり已小地獄谷ふくつり皆樓ふのがまうり岩居ハ余と  
京水とを伴ひてかの火を視せしむ・そもそも茲谷ハ山櫻まうり  
やゑ櫻谷とよびるを地火あるをめぐて四方四五十歩<sub>六尺を</sub>歩きゆきひ  
平坦の地とく地火を借りて浴室とく人の遊ぶ所とせしとぞ  
櫻谷とよびる処地火のたゞ小地獄とよびきこと花ひまどー<sub>うらを</sub> 薫噴  
くるべー・さてうちの火を視すふ一つの浅き井を作りてすの井中  
より火の燃事常の湯屋の火よりも盛あり上ふ釜あり一間  
四方の湯槽あり細き筈あり<sub>うち</sub>后の山の清水を引き湯槽小

小水中の火蠟燭のありゆが如一 左婆さとうがいふく此火のやうふりゆ  
处やうみもあり夜ふひよごとく火をりゆもゑ歎きよすと  
りす金こねが江戸の目めへ視ける所ところへ 奇妙きめうあり唐土からより此火  
を火井かせいと云い博物志はくぶしそ或もハ瑠璃るり代醉だいざい小見みえする雲臺山うんたいさんの火井かせい  
此地獄谷じごくこくの火ひのどくうきどす事ことの洪大こうだいうす此谷こくの火ひ勝まさらば  
唐土からと日本にほんとをちりくわめて火井かせいの最第一まことといふべし是これを見みる事  
越遊こしうの一奇觀きくわんあり唐土から小火井こかせいの在あ所北きたの蜀しょく地ち小属あすくと日の本ほんの  
火井かせいも北きたの越後えちごふ在あり自然しぜんの地勢ちせいふよしやん・さて一人の  
哥奴梯かのぢ上のうふいぢいぢあまくまくり小岩居こいわゐを呼よびよどもと樓ろうふのやまと  
余よハ京水きょうすいとくとく小此湯ここのゆ小浴お風呂を樓ろう上のうふハ早はやく三弦さんげんをひひせり浴お風呂  
をりく樓ろうふのやまと既既小杯盤おひわん狼藉らうせきたり嬪ひめ婿むすめ哥妓袖かぎそでをつつ杯おひわん  
素手弄そてなう赤朱唇あかしゆ謡曲謡迦陵頻かりょうひん伽かの声こゑ外ほか面めん如卉くわの色いろ臭におを添そなへば

地獄谷遠然極樂世界とあきら此妓どもを養ふ主入もあひ  
來り居て從る料理人ふ具一する魚菜を調味まくさう小  
宴を開く是主人俗中小雅を挾んで恒ふ文入を推崇のふ是  
日もとて來りて余ふ面識あるを岩居ふ約せりとぞ此人觀き  
ゆゑ自ら双坡樓と家号をその滑稽此一をりて知づて飄逸  
洒落かくとく人ふ愛せむ家の前後ふ坡ありとぞ双坡の字  
下へ得て妙なり双坡樓扇をいざて余ふ句をもふ妓も持つて  
扇を出そ京水画をかへ余即興を書をこきを見て岩居を  
そぞめちのく壁ふ句を題へ更小風雅の奥をもきりりかくて  
やう日も傾きけむと歸路を促しけるふ哥妓どもハ草鞋ふく來  
りしとくそそくらーがのありこまくあまふとすを寧かく  
をきりぐるみみ醉興あまく噪鬧へと途を行く細流あす所小

いはよだ紅唇粉面の哥妓紅視を褰て歩す花姿柳腰の美人  
等口にじをもてて水をこくるあひ余が江戸の目少、最珍らーく興  
あり醉客ぢんくをうそノ醉妓歩く躍る古繩を蛇と駆せば  
どまどく奴愕アガハシノ片足泥田アシタクモを衆人艱然と此  
途ハ凡て農業の通路アサヒノ想之ぎ茶店もく半途小至り  
古き社小入りてやまく一妓社の后アフタに入りて立すアリ石の水盤の  
涸カニる水を僅小掬手アハツハを洗ひへ私小去りてあんそめまゝ樹下シダマツ  
立せ玉ふ石地藏イワシロの前ふ並びなちまづ懷中より鏡ミラを出して鉛粉  
のをとくをげつるをつくら唇紅アラハシをすへ顔アザハシをみをこきての粧具を  
う小石佛の頭小置アハツハ外面女笄アマハシ内心如夜アラハシのり年アラハシやもあまアマハシ笄アマハシ  
あふあむの玉あんとひつむのう 日も已小下アラハシ晡アラハシさればあくへ也を  
もあくアラハシ小千谷アラハシ此紀行別小一本アラハシ吾アラハシ



○ 越後の人物

板額女ハ加治明神山の城主長太郎祐森<sup>すうしん</sup>古志郡の産あり又三歳の小児も知る酒顛童子ハ蒲原郡沙子塚村の産今猪屋敷跡あり始ハ雲上山国上寺の行法印の弟子あり玄翁和尚ハ伊夜彦山の麓箭矧村の産あり近世小いりて徳僧高儒和哥書画の人あり小もあらずとも遠く四方小雷名せざらむほ(画人吳俊明のもの)近年相撲小越海鷺<sup>うりがね</sup>濱ハ新泻の産九段龍ハ高田今町の産関戸ハ次第濱の産也常入ゆく力士の聞えありしハ頭城郡の中野善右門立石村の長兵衛蒲原郡三条の三五右門是等無双の大力ゆく人の知る所あり又鎧鷹小近き横戸村の長徳寺谷根村の行光寺怪力のきとえたり此人ハいづも獨て鐘を軽く掛かることやどろかば有一人もあり又孝子ありハ山下小村上小次郎新發田の菊女頭城郡の僧知良近くハ三鳴郡村田

村の百合女百姓伊兵衛<sup>いわお</sup>新發田荒川村門左門百姓丑之助<sup>うのすけ</sup>塚原の豆腐賣春松<sup>せう</sup>蒲原郡糸迦塚村百姓新六<sup>しんろく</sup>孝子の名一国小高かりき今存在もるもありとぞ

百樹曰余越後小<sup>こ</sup>は<sup>は</sup>板額ありハ酒顛童子の旧跡をもたゞ<sup>ま</sup>新泻をも一覽あ<sup>は</sup>名の聞えず神佛をもぞがたてまつり寺泊小の<sup>こ</sup>順徳帝の鳳跡義經夢因國師法然上人日蓮上人為兼卿遊女初君等の古跡かたづ<sup>め</sup>とおりハ小越後に入りてのち氣運頃を失ひ年稍僕<sup>やせ</sup>一穀の價日く小躍人氣穩あり心歸家小ありそ風雅をうしきひ古跡をも空<sup>むな</sup>過り惟平<sup>ひら</sup>く旅人とありそますかび<sup>かび</sup>文雅の人をも刺向<sup>さむ</sup>今小遺感あり嗟乎年<sup>あ</sup>の僕せ<sup>むか</sup>せ<sup>むか</sup>をりんせん

○ 無縫塔

坂額野陣之圖

長の太郎  
譲小遣ひ  
鎌倉より  
討手まじふ  
阪額さかのづか大村  
にて遠く  
先軍さきぐん勝て  
野陣のぢんを張す  
事ハ本文小  
あり文もや  
けりハ今省つ  
を小一圖を



蒲原郡村松より東一里來迎村小寺あり永谷寺といふ曹洞宗あり此寺の近く小川あり早出川との付より八町ばかり下小觀音堂ありその下を流す所を東光が淵といふ永谷寺入院の住職あるが此淵血脉を投げ入る事先例ありさて此永谷寺の住職遷化の前年此淵より墓の石ふき圓き自然石を一ヶ岸小出を是を無縫塔と名づけつて此石出とばその翌年又必も住職病死する事あり今ふひて一度も違ひする事あり此墓石大小小小よりて住職の心小應せば淵へせばその夜逆浪さきうなより住職のこのむ石を淵小出へたる事度あり先年凡僧がんそうより住職此石を見て死を惧おぞき出奔せ小翌年他國とくにありて病死せしとぞかの小此淵小灵ひるみありて天然の死を示をうべ友人北洋主人見附蒲原郡文ふみを立たてす件の寺を覽めぐらる詰尔本堂間口十間右小庫裏左小八間小五間の書を立たてす禅堂ぜんどうあり本堂より坂の左り小鐘樓しのわとうあり禪堂のうしろ小蓮池れんちあり

上ふ坂あり登りて住職の墓所ありかの淵より出るゝ圓石を入れ作の石の臺の脚あるのをも墓とも中央あるを開山ひらさんと/or左右ふ次第だいよりサ三基あり大うるハ徑り一尺二寸をもり八九寸六七寸あるより大小ハ和尚の徳小應おうぎぞとりひつてふとぞ臺の高さひりづまと一尺ちうりうりと語りまきかの淵小灵ひるみありといふむしー永光寺のやとり小貴人何某住玉ひトモ小その内室色情の妬うらみ夫をうらみ東光が淵小身を沈め冤魂惡竈あんこん えきとうとありとく人をあわせしを永光寺の開山ひらさん血脉けちみをうの淵ひぶ小もづれて化度けど一玉ひトモや名惡竈得脱くわだるそその礼とくかの墓石を淵ふひづて死期しけを示を是以今ふひても入院の時ハ淵小血脉を沈むと寺説えつふつふとぞ。まこと我が隣國信濃しなのふも無縫塔むほうとうの事あり近江の石亭いしていヶ雲根志くもねじふひづく前編靈信濃國りんしのくに異之部ことべ

高井郡たかい湯村横井温泉寺の前不星河ふしきが幅三町ばかりの大河

あり温泉寺の住僧延化の前年小此何中へ何方よりともより高さ  
二尺をうるうる自然石の方からくうるすこ石塔一つ流しまして実に  
彫刻せりごくふく天然の物あり此石出ると土民ども温泉寺へも  
せら事ありまゐらむ聖年住僧延化あり則ちア此石を立了九代  
以前より始り一ヶ代々九代の石塔同石同様ゆく少いも違はず並び  
あり或年の住僧此塔の出でる時天を辨へてその我法華千部讀  
經の願あり今一年ふと満り何とぞ命を今一年延一玉と念  
じてゐ塔を川中の淵小投してたり何事もく一年すぎ千部  
讀經のすと一月小件の石又川中ふあくらく其聖年をヒテ延化  
ありとそろ次に住僧塔のそと時何の種がひもうく淵へ落けたまう  
幾度うげたがて其夜そのトヨリでうり聖年病死ありとぞ  
此辺みぞ是を無帽塔と名づく以上一條越後小永光寺信濃小温泉  
寺事の相似する一奇怪といふ。百樹曰牧之老人が此草稿を視  
て無縫塔の縫の字義通ドガア譯字めやとて刪示して問ひけ  
もが無縫塔と書傳ふドリシハナクぬ雲根志矢無帽塔とあり  
無帽の字も又通トドガアモソクハ無望塔あやあくん住僧の  
心ゆく死ぐるやまか無望塔うづくら小無替の一笑を記——博  
識の確拠を缺つ

## ○北高和尚

魚沼郡雲洞村雲洞庵ハ越後国四大寺のうち四大寺と云滻谷の  
慈光寺トキシード村松小村上の耕雲寺伊弥彦の指月寺雲洞村の雲洞庵  
うち十三世通天和尚ハ霜臺君の謙信事親籍ゆく高徳の聞矣  
今も口碑ふのとまり景勝君も此寺小物学び玉ひーとぞ一国の  
大寺うち古文書宝物等を多くちの中小火車落の袈裟と

りあり香深の麻と見ゆ小血の痕のとより星を火車落とく  
宝物とちゆ由來ハモリ天正の頃雲洞庵十世北高和尚といひへ  
学徳全備の尊者ゆゑもせり其頃此寺小ちうに三郎丸村の農家  
小死亡のりあり小時一も冬の雪ありづき雪吹もあざりけま  
三四日ハ晴をまちて葬式をのぞルる小晴ざりとゞ強こゝとす  
をう一旦那寺あまと北高和尚をむく棺をひび親族ハまく  
人く蓑笠小雪哉あきそ送りやくそ雪途もや半かひアシ時猛風  
俄小もう黒雲空よ布滿て闇夜のぞくりべくともろく火の玉飛来り  
棺の上ふ覆かり一火の中小尾ハよまたう稀有の大猫牙をうそし  
鼻をあき棺を目づけとくんと人ことを見そ棺を捨あけつ  
まろひつ逃まど北高和尚ハモリも惧そひろそく口小咒文を唱  
大声一喝一鉄如意を舉て飛つ大猫の頭をうち玉ひ一から

や破きほん血やどく一とく衣をけぐ妖怪ハ立地ふ逃さ  
とく風もやも雪ももまと事あく葬式をひとあみけりと寺の  
旧記小のとくとく此時めくるを火車をの法衣と今ふく

百樹曰余越遊一々塙澤ふ在ー時牧之老人ふ伴もく雲洞庵小  
いづり塙沢より庵主ふも對詰うかの火車をとくの袈裟とくの物  
その外の宝物古文書の類をも一覧せりいづふも大寺もく祈禱  
の二字を大書一とく堅額ハ順德院の震筆うりとぞ佐渡へ辻  
震筆門前ふ直江山城守の制札あり放火私伐を禁ずるの文あり  
庭中池のあとう智勇の良将宇佐美駿河守又死の古墳在りーを  
先年牧之老人施主とて新小墓碑を建よし不朽の善行を  
りづ一唐土の書ゆもあき散見せり

○年賀の哥

余六十一還暦の時年賀の書画を集む吾国ばかり諸國の文人  
三都の名家妓女俳優來舶清人の一絶をも得たりとみ牧之贈と  
いふ叟をもすすむあり人より入ふりて千餘幅ふがくべり帖とめて  
藏をひらせ墨を風入とむる鋪ふづきた坐つきの障子をひき  
年賀の帖を披き並べきよす所へ友人來り年賀の作意書画の評  
あどこうめぐるをりしも順礼の夫婦軒下小我里言ひまち立けり吾が家  
常小草鞋をつゝせがまえから者小施をやゑそきをも錢をあふ  
此順礼の翁立きてとくとく年賀の帖を心あるまみふ見ひれどが  
云ゆうむすびあぐまきらも順礼の腰をと成申せんたんざ玉ひ  
といふも食のぞうあるをぐこみか似氣うれきとそのむがつうりと思ひ  
あぐく短尺ちぢりをとくとくけしほ

三途川さくさんより先さき百年も君きみがむすみをとふりやまん 五放舍

とあくこするふでのをとびも拙拙くを年賀ふへむとくからりとる  
趣向しゅこうとのひ順礼ゆうれい小五放舍ごはうせと戯てまわきてる名もすりうく友人と俱ともを  
ろに感かんト宿ゆどを施行せんやくくりのぞうせんあど友人ともをくぬぐふ  
きめとれど杖つえをとくめびて立きうけり國ハ西国にしこくとぞなりじうりのう  
うるうのよてやありけん

○逃入村の不思議

小千谷ちぢやより一里あまりの山手さんて小逃入村よだりむらといふありいにぞうとよぶ 此村この村むら小大  
塚おおつか小塚ちづかとよひく大小二ツの古墳こふん双ふたびあり所の傳つよ小大おほきを時平ときひらの塚つかと  
小きちいきを時平ときひらの夫人的塚めおととひく時平大臣夫婦の塚つか此地ち小在おき由縁ゆゑうき  
ことへ論はなしふをうむる俗說ぞくせつありあくまども差さか一いつの不思議ふしぎありちのひ  
ぎひをかくばむばむ一時平ときひらの夫めおと越後えちご小流おとせききあどどて此地ち不終ふしの  
くるふやあくあくんちの不思議ふしぎといへ昔むかより此逃入村よだりむらの人手習てうならひをもまづ

北高禪師勇氣圖



天滿宮の崇たかありとと一村の人皆無筆むひあり 他鄉ほか小身こみを寄よて手習  
ももとも崇たかりあくとども村むら小こ日ひを追おト字じを忘わき終つめ無筆  
ととあるこのこの文ふみ文字じの用もちある時ときハ他の村むらの者ものかたひとにて書用しよようを弁べんぞ  
又此村むらの子こどもとと江戸土產えどどさん錦繪きんゑををりひてて中なか小天滿宮こまつぐうの繪  
あまびびくくもも神かみの崇たかりたかの兆ありし事度ことどくくととぞぞままががの大  
塚つか小塚こつかを時平大臣夫婦ときひらだいじんふぶの古墳こふんををりひてて古いくくいいののててるるも何なん由ゆ縁えんある  
事ことあるあー 菅家すみけの筑紫ちくしみて薨こうト玉たまひひるハ延喜えんぎ三年二月廿五日じゅうごあり  
今いまを去はなる事こと 百樹曰ひゃくじゆ古今こきんとのれいへ牧まき之の老人じんじん文政三年ぶんせいををりひくくりり九百十五年前まへうりう今いまふふりり  
ても神かみ天あまの明あくくたた事ことももそそうう尊そんむむーーええ又またそそ不ふるる力ぢををるる事こと  
あり南谿なんせきが東遊記とうゆきを見る見る小南谿東遊こうとうゆ津輕つが小居こゐする時とき六七日むかも  
風雨ふういつつくくうち所ところの役人やくじん丹後たんごの人ひとや居ゐると旅店りょてん毎まいかかびびーーたたくく  
ややええ南谿なんせきわわびびののをを問たずひひききままああすすりり當國とうくに岩城いわきハは人の

ありとと安壽あんじゅ姫ひめ對王丸おうまるの生國なまくにありままいいのの人ひと此脚このあしを岩城山  
の神かみ小こままりり社やしろ今いま小こ在在り此兄弟いりき丹後たんご小こままよよの三庄太夫さんじょうだゆが為な小こ憤苦ぼんく  
するするややゑゑ小丹後こたんごの人ひとををいいままひひ丹後たんごの人ひと此國このくに入いままいいばば大お風雨ふうい有あて  
日ひををここるる事ことむむーーよりよりの事ことありあり丹後たんごの娘むすめををりりばば風雨ふういたたち  
ままむむややゑゑ小丹後こたんごの人ひとや居ゐとと搜ささむむををりりとと南谿なんせき子こ此事こと小こ遇ありあり  
すすりりとと記きせせりり右う小こりり兄弟いりきの父お岩城いわき判官ばんげん正氏まさう在京あの時とき諱え小こああひひ  
家いえの亡なびびるるハ永保年中えいほねんちゆうの事ことありあり今いまををるる事ことももそそ七百五十年しちひゃくごじゅうねんニ  
兄弟いりきの怨魂おんこん今いま小こ消滅しょうめつせせざざるる事こと人ひと知しをを以も論るる百樹ひゃくじゆ是ぜ王おう妻め多たは塙尾はなわ  
西遊記さいゆうき編へん景清けいせいが塚づかハ日ひ向むか小こありあり世よの知し了り處ところありあり其その母の塚づかハ肥後國ひごくに求く麻ま  
の人ひと吉よしの城じゆ下したよりより五六里ごろり東ひがし切き藩はん村むら小こままよよ此この所ところ小景清こけいせい娘むすめの墳づかも  
ありあり一い村むらの氏う神かみ小こままよよ此この村むらもも盲めい人ひとを忌いみむむ盲めい人ひと他ほか处ところよりより入いままば  
必ひ崇そんあり景清けいせい後ご小こ盲めい人ひと小こううしし也やゑゑ母の冥めい盲めい人ひと嫌うらすすとと所ところのの人の

よりト記せりとまゝの更逃入村の不思議小類せりありとども件の  
ニツハ社ありて丹後の人を忌。墓ありて盲人をきらひたり逃入村を  
墳あるやゑ小天滿宮の神灵此地を忌玉へきんごをりつ考あるふ  
かの古墳いよく時平ヶ血脉の人うべ

書載毛

- 謹で察る小菅原の本姓ハ土師アリトトト、  
先仁帝の御時大和國菅原といひ所小住するも土師の姓を菅  
原小改らる菅神御名ハ道實字ハ三童名を阿呼アヒとやなてまつアヒの  
余が考あれど文仁明帝小仕アシ玉ひテ文章博士參議是善卿アシガキの第三の  
長ナガけミドリふをミドリ文仁明帝アシガキの第三の  
御子兼和十二年アシハツ生玉アシタマアリ七歳の時紅梅を御覽アシタマ梅の花  
紅脂ベフのいろみぞ似アリ哉カク阿古アコが頬アカゆすめアシタマベウリケリ  
より月アシタマ下梅アシタマとアシタマ詩の題アシタマを玉アシタマいふ時即坐アシタマ月アシタマ輝アシタマ如晴雪アシタマ梅花似  
照星アシタマ可憐アシタマ金鏡轉アシタマ庭上玉房馨アシタマ御祖父アシタマ公清アシタマ御父アシタマ是善アシタマの学业  
を受嗣玉アシタマひて文藝アシタマハさアシタマ武事アシタマハ疎アシタマとアシタマをアシタマ  
○清和天皇の貞觀元年御年十五にて御元服同四年文章生小  
拳アシタマら下野アシタマの權掾アシタマ小考アシタマセラル同十四年御年廿八御母伴氏身

まく玉ひ陽成天皇の元慶四年八月晦日御父是善卿も身まく  
玉アリ御年此時管神ハ御年四十九アリ寛平四年御年四十八  
類聚国史二百巻を撰ミ玉ふ和哥ハ管家御集一巻詩文ハ管家文章  
十二巻同後草一巻後草ハ鏡紫著御作今世小傳ふ大納言公任卿が詠諺集小  
入まくよる管家の詩小送春不用動舟車唯別殘鶯ト落花  
若使詔先知我意今宵旅宿在詩家此御作ハ延喜帝のまざ  
東宮ナリ時令旨ありて一時の間小十首の詩を作り玉ひする其一ツ  
カリ○まく御若年より數階を歴ひて後寛平九年御年五十三  
權大納言右□將を兼らる比時時平大納言小任ゼム左□將と兼  
管神と並び立テ執政ナリ比時大臣の官名ナシシカニ大納言モ執政  
ナリ此年七月三日宇多帝御位を太子敦仁親王讓リ王ひ朱雀  
院入らせ玉ひ亭子院とヤ奉り御法体あくべ寛平法皇とぞ

ヤ奉る敦仁親王を醍醐天皇とも後よりハ延喜帝ともや奉る  
御年十三年号を昌泰と改元を同二年時平公左□臣管神右□臣  
相俱小帝を補佐一奉らる時小時平公三十七管神五千四百公  
左右の□臣とまとも才德年齡双璧をあきび故ふ心齟齬一々相  
和せど是管神の詭毒を得玉ふの張本カリ○そもそも時平公  
大職冠九代の孫照宣公の嫡男ふく代□臣の家柄カリ○も  
カリ○延喜帝の皇后の兄カリ○このゆゑ若年少て□臣の貴  
重小職しあり此人の乱行の一つを言バ叔父たる大納言國經卿ハ年  
老叔母ナリ北の方ハ年若く業平の孫女ムク絶世の美人カリ時平  
是小憲ミクニ夫人もまた夫の老ナリを嫌ふの心あり時平或日國經の  
許ふ宴一醉矣フク小まきアリ夫入を嘗りんといひトを國經も醉  
しまく戯言とちひひタマリまく國經が醉即ナリを見く叔

母を車小ゆき入まく立うり母腹ふ生きてるを中納言敷忠と  
時平の不道此を以て其餘を知るべからず不道の人あまば  
寛平法皇の御心より時平の任を除き 菅神御一人ふ國政  
をまうせ玉ひんとのむがへりあじふ延喜元年正月三日

帝亭子院（帝の御心を示す）朝覲のをうる御内心を示玉ひふ 帝も大

きふあらがい玉ひ其日菅神を亭子院ふめく事のよーを

内勅あり（同月七日後）比密事（玉ひの事）小許（玉ひの事）先

位（玉ひの事）帝小讒（玉ひの事）君の御弟齊世親王ハ道實の女を室

通（玉ひの事）電遇厚（玉ひの事）是以君を発（玉ひの事）親王を立國柄を一人の手

小握んとみ密謀あり 法皇も是ふ應（玉ひの事）風説ありと

言を巧ふ譲（玉ひの事）けり 時小延喜帝御年十七あり 白皇后ハ

時平公の妹（玉ひの事）内外より譖毒を流して若帝の御心を動く  
奉りするあり○さて時平（玉ひの事）毒奏（玉ひの事）中り同月廿五日左降の  
宣旨下りて右（玉ひの事）臣の職（玉ひの事）削（玉ひの事）従二位ハ（玉ひの事）太宰權師（玉ひの事）  
官筑紫（玉ひの事）左遷（玉ひの事）小定（玉ひの事）寛平法皇此事（玉ひの事）と聞（玉ひの事）て大ふを  
うをひの御車（玉ひの事）小定（玉ひの事）玉（玉ひの事）俄小御（玉ひの事）をそら玉ひ清涼殿  
小立せ玉ひ斯（玉ひの事）とやせ（玉ひの事）をあしうども左右の諸陣警固（玉ひの事）て事  
を通せぞ是も時平（玉ひの事）譖（玉ひの事）小味（玉ひの事）菅根の朝臣（玉ひの事）ひとくわ  
法皇ハ草坐玉ひ終日庭上小御（玉ひの事）晚（玉ひの事）本院（玉ひの事）還口  
玉（玉ひの事）○菅神ふ御子二十三人（玉ひの事）御男子四人（玉ひの事）四方（玉ひの事）流（玉ひの事）是も時平（玉ひの事）毒舌（玉ひの事）かよまく姫（玉ひの事）都（玉ひの事）幼（玉ひの事）アマアマ筑  
紫（玉ひの事）年頃愛玉ひ梅小まく別を（玉ひの事）もなまひ  
東風吹く匂ひをよ梅の花主（玉ひの事）と元春（玉ひの事）忘（玉ひの事）此梅つゝ

爲する事ハ舉世の知る處あり又櫻を 櫻花主を忘るゝもあらず  
「ん風ふうとくせば」。斯て延喜元年辛酉二月朔日京の高辻の  
御館をりて玉ひて津の国須磨の浦小日を移つて、抵りたまへり  
セキをかひすを須磨の日記を今もせふのこまく一説ふ偽書といふ。筑紫太宰府  
ふく離家三四月 落涙百千行 万事皆如夢 時々仰彼倉  
御哥小「夕ざと野ある山ある立烟りうげきよりとせりをまうりけ」  
又雨の日小「朝かくと人をうすとあまく一ぬき夜ひるトモあまき  
ねまくとおゆのつじふひす玉ひて不出門行といふ詩を作り玉ひて  
す歩も門外へりて玉ひむ是朝廷を尊恐御身の謫官するをつま  
たまゆゑあり御匂小「都府樓、總看瓦色、觀音寺、只聽鐘聲」  
○管神延喜元年二月朔日都を出玉ひて筑紫へり玉ひて八  
月あり是より前の御詩文を管家文草といひ十二左遷より後  
のと管家後草とも一巻今も母つて後草ふ九月十三夜の題  
ゆそ「去年今夜侍清涼、秋思詩篇獨断腸」恩賜御衣今  
在此 捧持毎日拜餘香」此御作不注ありその趣ハ。去年と  
昌泰三年あり延喜元年其年の九月十三夜 清涼殿の時候あり  
時秋思といふ題を玉りし不詩の意ふことせよ諫たてまつり  
其ひをもを容玉ひよろこびせりて御衣を賜ひすを此配所ふも  
をすく毎日御衣ふのぞりたる餘香を拜をと帝をもひ御恩残  
忘き玉ひする御心の誠を作り玉ひすあり此一詩をもつても無  
實の流罪ふ所へり露をうりも帝を恨み玉ひざしを知るべ朝  
廷を怨みひそ魔道ふ入り雷公ふたり玉ひすとの妄説ハ次  
年より。高辻の御庭の櫻枯らすとき玉ひて「梅ハ死桜ハか  
世の中小松をりことつまうりけ」。また太宰府小謫居あひ事

三年五月延喜三年正月の頃より御心例うゞ二月廿五  
太宰府小薨モリド至つり御年五十九御墓ハ府モリちをき四ツ辻といふ所  
小定め御棺モリをひざモリタモリ途トチ中モリふとゞまりてうどナカマモ別モリ所モリ所  
葬モリ奉る今モリ神廟是あり。延喜五年八月十九日同所安樂寺  
小始モリ。管神の神殿を建らる。味酒の安行モモキといふ人是をうけ  
たまモリ同九年神殿成是よりとき四人の御子配流をやる。玉  
玉モリ故の位モリ玉モリ玉モリ。神去玉モリのち水旱風雷の天  
寢モリ。ありと人の心安モリ是ぞ管公の崇モリりよもんモリ。  
風説あけモリとくや。○管神薨去より七年ふあくモリ延喜九年  
四月左モリ臣藤原時平公薨モリ歳三十九又一男八条の大将保忠モリそ  
美中納言敦忠モリが時平の女モリ延喜帝の孫の東宮モリも相モリて  
薨モリせらる。又時平の謫モリ毒不荷モリ瞻モリ。管根の朝臣ハ延喜八年十月

死モリこととつの事モリをも。管神の崇モリりと世ふ流布せモリ。

管公の鬼モリ謫モリを世の人哀戚モリたるをも。延長元年三月保  
明太子薨去モリ。時平の孫モリ。同年四月廿日贈位正三位本官の右モリ臣

小復モリ玉モリ。神モリ三十一年。一條院の御時正曆四年五月廿一日

管神小正一位左モリ臣を贈モリ。管神百年。同年閏十月十九日  
大政モリ臣を贈モリ。此御神の御位ハ正一位大政モリ臣モリ。  
後年屡モリ神モリの赫モリたモリ徵モリ。ふよりて天満宮或

自在天神の贈称モリ。○そもく醍醐天皇ハ在位百廿代の御皇  
統の中モリ殊モリ御德モリ。延喜の聖一代と称モリ。御在位の  
久モリしゆゑ延喜帝とも奉る。御若冠の時モリ。賢者モリ  
の聞えある重臣の管公を時平大臣モリ。一時の謗口モリ。信モリ玉モリにて  
其實否モリ。玉モリ卒示モリ小管公を左廷モリ。御一代の

失徳とやいひべきあらるを 菅神の恨ミ玉ハざりヒ配所の詩哥小  
てもあゝ 管神ハラミ玉ハぞとモ賢徳忠臣の冤謫を天のい  
きどりて水旱風雷の異寔謗者奸人の死亡わししきん俗子ハ寔  
を 菅神の怨灵とちるハ星又 菅神の賢行ふ瑾つけうりあれ  
ども竊小謂く賢者ハ旧惡をかづれどりあす事ふことをトヨミ冤謫  
慄愁のあきり讒言の首唱トヨミ時平大臣を肚中トモ恨ミ玉ハ  
トモあらべり本編ふひよ逃入村を神の忌玉す其徵とちるの  
ツカニ。神去リ玉ヒトヨリサハ年の後延長八年六月廿六日  
大雷清涼殿小隕テ藤原清貫大納言平稀世右中其外時候の人々  
雷火ふ即死モ 延喜帝常寧殿小渡御ありそ雷火を避たまふ  
星をも 菅神の崇ともばいよ非説うと安齋先生伊勢平藏の  
管像辨もつり太宰府より一里西小天拜山あり 菅神あの

山ふのやうて朝廷を怒む告文を天小捧さげて祈り雷神とあり  
玉ひとりふ賢德の御心をあそび俗子の妄説を今小傳まわせた  
きり和漢三玄アソシ會小も實まことす小記メモすハ不出門行の御作小  
心を深めざるもあん○法性坊尊意さんい寂山えいざん小在アリ時管神の  
幽冥來り我冤謫かうゑんぜきの夙懃ゆくうを償むぐらと願ねがく拒こど  
みられ尊意曰卒土そろとハ皆王民おうみん玉たまり我わ皇こうの詔めでをうけ玉たまを  
避さけふ所ところ管神かみじん怖色ちよいろあり適柘櫛さくしを薦すす管神かみじん呻うなづを吐ぬ  
焰かのへを玉たまり玉たまりとひの故事うきごとハ元亨エイヒ釈書しゃしょの妄說まうせつ小起あが此書このしょハ今天保  
廿年じゅうねん前元亨エイヒ二年にねん東福寺とうふくじの虎閣和尚こく閣の作つくかく奇怪けがいの事を記き佛者ぶつしやくの筆癖ひきせきありと安  
齋先生さんざいせんせいもより○白太夫しらたゆとひの伊勢渡會いせとくわいの神職じんしょく管神かみじん文墨ぶんもく小於  
格外ごくわの懇友きんゆうありとも小北野こほり小祀まつり今小社まつりあり此御神ごみやの事を作  
松王櫻丸まつおうの名ハ梅うめ龜かめの御哥みや○北野こほりの御社ごしゃの始はじハ天慶五年六月九日より

勅命ふよりて建創其起りハ西の京七條小住す文子との女不神  
説ありふよりてあり北野縁起ふ○世ふ渡唐の天神とひて唐服ふ  
梅花一枝を持玉を画く故事ハ佛鑑禪師寺の開山國師号の始祖  
博多小住玉ひする跡の地中より掘ひてある石ふ管神の玉唐  
土渡り玉ひて經山寺の無準禪師小聖一國師の師うり法を受玉ひて日本へ  
歸り玉ひると件の石小勝つけあじと古書ふ見えてるを拵とく  
渡唐の神影を画き傳ふるうり比事固妄説ありと安齋先生の  
管像辨ふりて管家聖庵傳暦とく書の附錄ふ沙門師嵩○管神  
左遷の實跡を載すハ日本紀畧抄錄小卷序扶來畧記卷○日本史  
百三の列傳五十○管家御傳記神統管原陳經朝臣御作正史ふれ巴証とて其餘虛實混合し  
たる古今の書籍敬奉をくそ○本朝文粹小奉する大江国衡の  
文ふ天滿自在天神或ハ塙梅於天下輔導一人帝の或日月於天

上照臨萬民就中文道之大祖風月之本主也云大無家ハ  
管原家と俱小朝廷小累世もる儒臣たりある小管神を崇  
称する事件の文の如一是以凡文道不閑者此御神を崇ば  
んや信せざんや○かまと管神を祀る社又もかまと雷除の護  
府とりの物あり此御神雷の淳名をうけ玉ひするゆゑ神灵雷  
を忌玉ふやゑ小此まよりうゐを驗あづ一○さて如件條説をも  
本編ふりて逃入村の神灵の事ふ因て實跡の書とすを摘要  
て御神の畧傳を見當小示をうり固不学のをまことば要跡の  
漏すも説の誤謬たるものアーアもくと謹で附記を○再按る  
孔子の聖なるもの生る時よりも昭然とその墓十里  
荆棘を生せモ鳥も巢をむきむ闇羽の賢なるも死して神と  
ありて祈小應を是則生ハ形を以て運り死て神を以て運せ矣

七ツ釜之圖



ありとゆ 文海坡沙 菅神を此論ふ近一逃入村の事を以て千年  
小ちうた神 灵の赫くよること仰くア 敬くア 盖冥々の年月を  
置そと云けバ百年も猶一日の如くあるア 菅公の神灵ある事和漢  
多き事を云ひ

○田代の七ッ金

魚沼郡の官驛十日町の南七里計妻在庄の山中此へまづ小田代といふ  
村あり村を去事七八町余七ッ金といふ所あり里俗壠を淹七段あゆゑ平  
七ッ金と云ひます銚子の口不動壠をどりふも七ッ金の内みて妙景  
奇状筆をりづく云ふぞ第七番目の金の地景を爰小圖もるをそ  
其大槧をあらア此所の絶壁を堅御号横御号といふ里俗伊勢より  
御師の持きてるむしの箱をちぐさまとひ此絶壁の石の箱の  
状ふ似するをりて斯のありその似くアといひ此せうへきの石との  
落ユあるを視とぶ厚さ六七寸計ふて平もあり長さ三四尺ぞ

長短ひとくそぞ石工の作り色づうが如ア此石數百万を堅ふ積重めて  
此數十丈の絶壁をあそと頂ハ山ふつまそ老樹鬱然たり是右の方の  
堅御がうあり左ハ此石の寸尺小ながへざる石を横ふ積うみて數十  
丈をあそと事右小同トそのまゝ人あらず行儀とつあげゆるごとく  
寸分の斜角天然の奇工奇妙不可思議あり此石の落たらを  
此田代村の者見るべの物小用ふ片石少とも他所小用あまバ崇あひ  
事度ううとぞ余文政三年辰七月二日此七ッ金の奇景を尋て詔  
撃一たを記モ天の范う他國ふも是小似する所あらず姑くその  
類を示モ○百樹曰余仕ふ在レ時同藩の文学閑先生の話小  
君侯封内の丹波山ふ天然不磨の状うる石をつゝあげ柱のやう  
を並て絶壁をゆ一満山此石ありとよと見又西国の山ふ人の作りた  
うる磨の状の石を産もす所ありと春暉が隨筆あく見ゆる事

ありき今その所をすひゆきど

○又尾張の名古屋の人吉田重房著——鏡紫記行卷の  
九小但馬國多氣郡納屋村より川船少く但馬の温泉小抵る途  
中を記——條小曰。猶舟少のり行。右の方小愛宕山宮島村  
野上村石山也名少と追續まつづきあり此石山の川岸小臨さり所小奇よき  
石あり其形よし磨礲ひきうらの如く上下平ひら少周ハ三角四角五角八角  
等少て石工の切立きりたて如く色青黒せいくろ是を掘出くわいだつ跡あとありて  
洞あなのどう天下の廣ひろきよへ珍奇ちんきある事ことあきのありけり  
是も奇石きせきの一類るいあとば筆ふでの次つぎからつ

北越雪譜二編卷之三終



